
竜女

清佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜女

【Nコード】

N4721BA

【作者名】

清佳

【あらすじ】

ファンタジーです。。

かつて、神と呼ばれし一族が居た。

突如として現れた彼等は、太陽のごとき髪と茜石を額に抱き、足元に不可解で獰猛な獣を侍らせていた。

遠く離れていようと一瞬で敵を葬り去る彼等に何もできず、

この世はたった数日で掌握され、以後、残忍とも悪政ともいわれる治世が続いた。

意に沿うよう窮屈な暮らしを余儀なくされた者達は数百年後に主権を取り戻す。

それは同時に争いを好まぬ人々にとって数百年の小さな幸せが過ぎ去ったことも意味していた。

わずか数十年前、この世には神と呼ばれし一族が居た。

- - -
- - -
- - -

「こっちの白ずくめとあっちの黒ずくめがいい」

誰でもいいと言ったが、まさか見ず知らずの傭兵から選ぶとは思わなかったのだろう。

父は一瞬なんとも形容しがたい表情を浮かべた。しかしそれもほんの数瞬。

望みは叶えられ、私は彼らを供とし旅に出た。

行くあての無い旅だが、少しでも早くここから離れねばならなかった。

「はい、こんにちはー！」

出発前の顔合わせに現れたのは三人。

一人は金と黒の斑色の髪を持つ雇い主の少女。

一人は全身を覆う白い布によって年齢はおるか性別すら伺い知れない細身の人物。

一人は黒い髪に黒い瞳、肌は惜しげもなく日に晒されており、いかにも傭兵然とした大柄な男。

「出欠をとりまゝす。その前に名前を聞きます。お名前は何ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事がない。二人して無視である。

ほとんど荷物らしい荷物も持たぬまま即座に出発したが、これはひょっとしてやってしまったかという思いがよぎる。

いや、大丈夫。自分を信じるのだ。それにミスチも唸らないし、きっと大丈夫。

ちよつとシャイなだけだ！

「その前に確認したいことがある」

言葉を発したのは黒いほうだ。

見たことがない獲物を腰といわず背といわず装備できるだけ装備している。

父に紹介された私を見て驚きを隠さなかったが、賢明にも何も追求はしなかった。

「5日分の料金は君のお父上に払ってもらった。が、契約は最低一年だ。残りは誰が払ってくれるんだ？ 後のことは君に聞くようにとのことなので、今ここでその説明を願いたい」

至極もつともな問いだった。

この男の提示額は半端ではなく、たった五日の対価でそこそ大きな酒場を開店できそうな雰囲気だった。

「ここから四日移動した街にお父様の古い友人がいらつしやるので、その方に払っていただきます」

とりあえず最小限の情報を出し、反応を待ってみる。

「払って貰えなかった場合は？」

予想通りの質問だった。あの額をすんなりと払うとは普通考えられない。

「その場合は、契約解除です。違約金がない代わりに契約金はご提示の倍額というお約束だったと思いますがー？」

「どちらかが人買いだったらどうするんだい？」

横槍を入れてきたのは全身を白い布で覆った人物。

契約前は顔を覆った布越しにじっと私の腕を、正確には腕に付けた蛇のお守りを見ていた。

銀髪がこぼれていたので、体格のいい老人か、華奢な若者が迷っていたのだが、声を聞く限りでは後者だったようだ。

「それは、眼鏡違いだったということ、しょうがないですね。」
最悪、そうであってもあの場から少しでも速く遠くへ行くという目的が達せられれば問題はなかったが、それを言ってしまう必要はないように思われた。

それに、白いほうの契約金は安すぎた。

当初はご老体の暇つぶしかと思っていたが、どうやら注意しなければならぬ人物だったらしい。

「私のことはリルって呼んで。最終目的地には一年かからずに辿り着けると思いますから、それまで二人ともよろしくね。副業はナシにしてくれると嬉しいなー」

二人がどう考えたかはわからないが、少なくとも次の街までは護衛をしてくれるようだ。

なかなか律儀そうな買い物をしたと自分を褒めた。

何事もなく3日目の夕方に目的の街についた。

予定より少し早かったが、二人には宿で待機してもらい一人で行動する。

真っ先に情報を集めたが、故郷の森の話は何も無く、とりあえずは一安心というところ。

ならばあとは決まっている。

まずは中性的で動きやすい服を手に入れた。

数日後に控えた祭りのためか、街には人が多かった。

宿に帰って三人で夕食。

相変わらず名前どころか通称も教えてくれない二人が休んだのを確認してから自室へ戻る。

先ほど購入した服に着替えて額飾りを着け、持ってきた足布を巻いて窓を開けた。

結構汚れていて滑りそうな屋根だ。

「ミズチ、おはよう」

小さな声で呼びかけた。

腕に付けていた蛇がするすると動き出し、首元へ移動していく。

その動きが止まったのを見計らい、窓枠を蹴った。

男は赤い光で目が覚めた。

いや、赤ではない。茜色だ。

やはりあの森は、ミベラの森は彼の一族のものだった。触れてはならなかった。

ベッドに縛り付けられたまま身動きのとれない此の地の太守は深く後悔した。

隣にいるはずの人は気配すらせず、それが一層不安を煽る。

「其に問う。我らの森、侵せしはいかなる所以か」

物で縛り付けられているわけではないのに天井しか見えない。

声は聞こえるのに男か女かすらわからない。が、若いような気がした。

「セデル」

声の主は促すように太守の名を呼んだ。今では呼ぶ者のない、懐かしい名だ。

不意に涙が流れた。

「――続の間に衛兵が」

「全て眠りにについている」

太守を遮る声は優しかった。

今をおいて他にないと思えた。

「私どもエスピチフの民はリリア族の御方々に変わらぬ敬愛と思慕を抱いております。今回の件は私の不徳の致す限りであり、民には何の責もございません。どうか、どうか民だけはお助け下さいますよう伏してお願い申しあげます」

「其の方一人で責を負うと？」

「はっ、、、いえ、叶う、ならば、妻、、、妻の後見人を務め、現在エスピチフの財務を担当する者を・・・共に――」

言葉が続かなかった。

とても素晴らしい人だったのに金に狂ってしまった人。

任せてしまったのは自分だった。

「其の方の敵か？」

「いえ、全て私の不徳の致す所でございます」

夫と父のように慕う者を一度に亡くす妻が不憫だった。

まだ幼き我が子は大きくなったときには父の顔を覚えていないだろう。

悲しかった。

だが、ここで逃げるわけにはいかなかった。

エスピチフの全ての民の命がかかっている。

自分は太守であり、此の地の代表だった。やはり政には向いていなかった。

今は行方の知れない先の太守を思い出し、自分を叱咤した。せめて民の命ぐらいは守りたいと強く思い願った。

「泣くな」

ひんやりとした指が目じりに触れた。

これほど近づかれてもやはり性別すら判らなかった。解るのは額に輝く茜石のみ。

闇夜の前の夕暮れのようにだと思い自ら目を閉じた。二度と開くことは叶わないと知りながら。

セデルは騒々しい喧騒で再び目を覚ました。

隣にいるはずの人を探すと、その人はいつもと変わらず安らかな寝息をたてていた。

恐ろしい夢を見たと思いを巡らせていると複数の足音が扉の前で止まった。

「何用だ」

「申し上げます！ 全ての庫が、か、空につー！」

夢ではなかったのだと理解した。

「財務担当の者を拘束せよ」

「は？ しかし・・・？」

「拘束せよ」

起き抜けだが泣きそうな目をした妻に隠居して頂くことを伝えた。感謝の意を表す礼が返ってきたのには驚かされた。

三人は宿の主人の祭の勧めを断り、次の町へ向かう。

主人を押しにかけておかみがいうには、この街の祭は太守から街の者へ贈り物を送るといふ珍しい祭であるという。

「ほら、ここは例の一族の森に近い街だから、こういう祭になったみたいだよ。あの方々は善良な民にはお優しく、善良でも民を束ねる者にはお厳しかったからねえ。まあ、もっとも私の小さいときに比べれば、今の贈り物の中身なんて役に立たいもんだけどね」

おかみの子供の頃は、大人の背丈ほどの箱に隙間なく詰め込まれた食料や布や、その時々に必要な物だったらしい。

一人に一箱ずつ、全ての民に箱が贈られるという。

「最近なんて、特にあの財務担当の・・・誰だっけ？ あいつにな

つてからは中身なんてそりゃ酷いもんで、箱だつて年々小さくなつて今じゃ片手に乗るぐらいだし、あゝあ、本当にリリア様はお隠れになったのかねえ・・・」

それでも彼の一族を思い、飲めや歌えの大騒ぎになるそうだ。

民に優しく治世者にとてつもなく厳しい一族のお膝元であればこそ、もはや形式上とはいえどもこういう祭が問題なく開かれるという。観たい思いはあつたがそろそろ移動したほうがよいだろう。

今年はきつとよい贈り物になりますよと心の中で呟き宿を後にした。道を急ぎ、山道に差しかかるつかというときに、兵が現れた。

「荷を検めさせてもらう」

少し前に黒い方が道を変えたほうがいいと言っていた。

どうやらかなり正確な情報か嗅覚を持っているようだ。

「こちらの御方は火急の用にてトケアィムに戻られる途中でございます。こちらが道中の許可証にございますれば、ご無礼な手出しは無用に願います」

その許可証とやらを見た兵は慌て、通してくれようとしたが、一人だけ強固な兵がいた。

「トケアィムつて、あそこは丸顔が多いだろ！？ あの女はどうみても違うだろ！？？ それにこの証書の格にしては供が少なすぎる！ 絶対おかしい！！！」

聡く、かつ職務に忠実な者がいたようだ。

面倒になって無言でリルは荷物を渡す。

荷物は一つきりでそれは彼女のものだった。

「ララ レトレト ヲシ ヲシラ ケララ ララ？ アオシ ヲシラ ケララ ドス！」

につこり。完璧な冷笑。

その言葉と態度はトケアィム特有のものだ。

荷の中身は女性物の着替えと少しの日用品だけだった。

「大変失礼いたしました！ 道中お気をつけください！！！」

隊長格と思わしき兵が平伏しかねない勢いで送り出してくれた。

「なんていったんだ？」

てくてくてくてく。

月明かりと別の光が前方に見える。峠の宿はすぐそこだった。

「だってえ、急にそこのおじーちゃんがトケアームとか言うんだもん」

てくてくてくてく。

「で、なんていったんだ？」

黒いのはなかなかしぶとい。

引き下がってくれそうにないので種明かしをした。

「ようこそ、おいで、おいしい美味しいお菓子はいかが？ 甘くて

美味しいお菓子は当店で！」

ぶつという笑い声が聞こえた。

「エスピチフの財務担当。今の太守の奥さんの叔父さん。君に雇われた場所の近くの例の森を開拓しようとしてた人なんだが、内々に引退させたたそうだ。ついでにいうと今年の”贈り物”は久しぶりに超豪華らしい」

数時間前のことなのに情報収集精度が異常だった。

そんな傭兵を選んでしまった自分の強運だか悪運だかに仲良くしようと呼びかけた。

「ふ〜ん？」

てくてくてくてく。

「あと、足布は過信しすぎないほうがいい。同じところを二度踏むと逆に足型が強烈に残ってしまう。宿の屋根は致命的だし消すのはずいぶん大変だったから追加料金が欲しいところだ」

「うん、わかった。鼻が利くからポチって呼ぶねー」

「まで。変更を要求する」

聞こえないフリをして白い方の眼を覗き込む。

「そつえば、おじーちゃんは、なに出したの？ 印籠？」

「無視かよっ！」

「おじいちゃんは簡便していただけないでしょうか」

「じゃあ、名前教えてよ・・・って言っても無言だろうし、命名、めいめー。うーんと、”おーじ”でどう？」

殺気というのはこういうものだというお手本のような何かが銀髪の間、青い瞳から放たれた。

「それは非常にまずい」

「えー、いいじゃない。その瞳の色だと、」

「察しろ」

「はーい」

「銀髪と青い眼のおーじ、地が出てるぞ？」

「煩い、黙れ犬め。アウトオブプレイスアーティ」

「よし、おじいちゃんも黙ろう。もう皆静かにしよう、そうしよー」

「まあ？ とりあえず？ 脇道いつとく？」

宿を目前にしながら各々の事情で脇道に入る一行はどこぞの豪族の娘とその従者を装いつつ、以降『ミベラの竜』と呼ばれることになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4721ba/>

竜女

2012年1月12日22時51分発行